

闇黒の探求と表現——“Heart of Darkness” 試論

相 良 典 江

“Heart of Darkness”¹⁾ における船長マーロー (Marlow) のアフリカ奥地への旅を, unconscious-self への旅, あるいは self-discovery の旅として考えることは, Albert J. Guerard などによってなされてきた解釈である。又 Lillian Feder は, *Aeneid* の第六巻における Virgil の旅とマーローの旅とをくらべ, 多くの類似点を指摘した。しかし, 作者 Joseph Conrad は, そのような Bildungsroman 的遍歴, 神話的旅行, あるいは伝統的な魂の遍歴, 栄光への巡礼, 乃至聖杯探求に通ずる旅を, 使い古された方法で, マーローにさせているのではない。

第一, “Heart of Darkness” は, そのような, 中心人物の長年月に渉る遍歴のあとを克明に追って記述するといった, 長篇的な方法で書かれてはいない。事実この作品は長篇ではない。かといって, 短篇でもない。H.E. Bates が *The Modern Short Story* (pp. 141-2) で言っているように, 彼のいわゆる短篇は, 長さからいっても方法からみても, 純粋な短篇の部類にははいらないのである。コンラッドがえらぶ言葉も語法も, 短篇には不向きなものが多い。そのような言葉や語法は, 長篇にふさわしい, ずしりと重味のある内容——恐るべき深い真実追求と表現——との, 密接な関連から生れたものである。換言すれば, なるほどこの作品は, 全体としては, コンラッド特有の暗示的技法によっているとはいえ, 彼のすべての作品を貫いている深い真実を, この作品では, 種々の技法はもちろん, あらゆる言葉や語法を用いて, 徹底的に追求し, 明らかにしようとし

1) 本作品からの引用文に附した頁数は *Conrad's Heart of Darkness and the Critic* (ed. by B. Harkness) Uni. of Illinois, San Francisco, 1960, に従う。

ているのである。畳みかけるような冗舌——読者に具体的に「見せる」ことを旨とした彼に（そしてまた短篇一般に）ふさわしからぬ、抽象的でさえあり必ずしも具体的で static な image を与えない言葉の積み重ね——を屢用いるのも、その故である。しかし、こうして Marlow のかもし出すいわば主観的且つ思想的雰囲気と、アフリカの実際の *heart of darkness* それ自身の描写がかもし出す、いわば客観的雰囲気とが、相互に共鳴しあって、濃密な独得の雰囲気を以て、霧のように作品全体を掩っているのである。この雰囲気醸成は、一種の poetry であり、その持続は、長篇では不可能であるが、さりとて、短篇では、それが可能ではあっても、これほどの盛りあがりをもつことは、E.A. Poe の如き鬼才にあらざるかぎり、これまた不可能の技に近い。

このような理由で、この作は、長篇でも短篇でもなく、中篇以外の何物でもないのだ。即ち、長篇の思想的内容と、短篇にみられる簡素な筋と濃厚な雰囲気と、両者の長所を併せたものである。従って私は、この作品を中篇として考え、その構成や技巧を考えながら、マーローの旅が、彼、あるいはむしろコンラッドにとって、どのような意味を持っていたかを考えてゆきたい。

物語は、Thames 河に碇泊した船の上で、マーローが数人の旧友たちに向ってコンゴの旅の経験を語るという形になっている。従って、暗黒の大陸の中心に向って蛇のように曲りくねった川をさかのぼってゆくマーローの旅の図絵は、テムズ河の額縁の中に収められ、その額縁の意識は聴手の “We” から成り、図絵そのものの意識は “I” から成りたっている。（図絵中にもたびたび地の文が挿入され、そこにマーローとは別の主語 we がまじり、それによって、一層額縁を意識させられる。）この額縁形式は、しばしば短篇において、圧縮やまとめのために、いろいろな形で用いられる形式であるが、この作では、単なる形式以上に、内容と密接なつながりを

もつ。額縁は境界であり、図絵と外界を遮断すると共に、現実と超自然、特殊と普遍をつなぎ、更に図絵の意味を読者に伝える窓となるのである。

即ち先ず額縁は、絵画を現実から遮断して、別の世界を造りあげる。この作品における図絵には、現代を絶した永遠の、つまりは時空を超えたこの世ならぬ別世界、fantasy、悪夢、いや死の世界を形造る。Death, dead, sepulchre, grave などという言葉が頻繁に出てくるのもこの故である。

またテーマの提示がここで行われる。今では世界の文明の一つの中心であるこのテムズ河も、二千年の昔は原始の暗黒の世界であった。いやそれは昔でなく、昨日のことだ。そして、今もなお、その暗黒はわれわれの内部にひそんでいる。同時に、テムズ河は、暗黒の大陸コンゴ河に通じている。即ち暗黒は人間の中心にも、文明世界の中心にも、今なお存在している。そしてアフリカの奥地に象牙をとりに行った Kurtz もまた、二千年前の青年のように、外部の暗黒の魔力に冒され、内部の暗黒を目ざまされたのだ。こうして、このテムズ河は、アフリカの奥地の入口となり、その暗黒の図絵を囲む額縁となりながら、その意味を伝えるのである。

のみならず、この額縁には、本文即ち図絵中に提出される種々の思想や事象の伏線となり、問題の提示となるような個処がいくつもある。たとえば、次のような二三の例である。

(1) 弱者を殺戮し掠奪する証明者たちの行為を償ってあまりあるのは、idea であり、unselfish belief in the idea であり、something you can set up, and bow down before, and offer a sacrifice to (p. 4) なのである。

(2) ローマ軍の指揮官たちは、この idea に駆りたてられて、まっしぐらにテムズ周辺の闇にとびこみ、征服をほしいままにした。しかし、暗黒の世界で朽ちる人間もいる。

...a decent young citizen in a toga...feel the savagery, the utter savagery, had closed round him—all that mysterious life of the wilderness

that stirs in the forest, in the jungles, in the heart of wild men. There's no initiation either into such mysteries. He has to live in the midst of the incomprehensible, which is also detestable. And it has a fascination, too, that goes to work upon him. The fascination of the abomination—you know. Imagine the growing regrets, the longing to escape, the powerless disgust, the surrender, the hate.” (p. 5)

つまり暗黒はそこへきた文明人を腐らせる。

(3) また, Marlowe は, 現在における Darkness の中心——そしてまた言わばこの世界の中心であるアフリカの奥地への旅が, 彼にとっていかなる意味をもったかを語る。

Yet to understand the effect of it on me you ought to know how I got out there, what I saw, how I went up that river to the place where I first met the poor chap. It was the farthest point of navigation and the culminating point of my experience. It seemed somehow to throw a kind of light on everything about me—and into my thoughts. I was somber enough, too—and pitiful—not extraordinary in any way—not very clear either. No, not very clear. And yet it seemed to throw a kind of light. (p. 5)

即ちそれは, 一つの啓示——いわば heart of the matters を解く鍵を与えてくれたのだ。それを語ろうというのである。

言いかえれば, この story は, Darkness の核心の研究である。しかし真実とは, ものの内部に核のようにあるのではない。マローーにとって,

...the meaning of an episode was not inside like a kernel but outside, enveloping the tale which brought it out only as a glow brings out a haze, in the likeness of one of these misty halos that sometime are made visible by the spectral illumination of moonshine. (p. 3)

即ち, 事物の本質は雰囲気となってあらわれるのであり, static な形にあるのではない。ここから濃厚な雰囲気描写が行われるのである。

かといって, 雰囲気を醸し出すような形容詞を並べているわけではない。事物や人物を簡易に sketch しているにすぎず, いわんや心理描写な

どは行っていない。しかもその風景等の道具立や、ちょっとした事件や、聞いた噂などを伝えるに用いられる言葉の積み重ねから、黒い霧のように雰囲気が立ちのぼり漂っている。それが暗黒の核心の暗示になるのである。客観的の真実なるものは確めようはない。特にアフリカにおいてはそうである (p. 18)。真実は、事物の内部に果物の核のように存在するのではないと同様、明確で static な輪廓にもまた存在しない。真実とは、事物が発散する雰囲気だとすれば、それを描くより他に方法はない。そしてこの雰囲気を描写するには、印象主義の絵画、殊に後期のそれ——の方法によるより他はないのである。光や影や色彩の乱舞の中に、形象は埋没しかけている。しかし、marlow は更にそれに追討をかけるように、暗示的な言葉を挿入し、それが雰囲気を高めると共にその意味を示唆する。

この雰囲気、即ちアフリカの奥地の雰囲気は、既に最初から紙面に漂っているのだが、マーローがコンゴ河に魅力を感じていたことを語るあたりから、次第に濃くなってゆき、荒廃や空しさや死を意味する言葉もまた増してゆく。あとでくり返していわれるように、heart of darkness は死の世界である。そのことは、パリの船会社で、彼が地図上のコンゴ河をみたとき、はやくも示唆される。“Dead in the centre. And the river was thereof ascinating—deadly—like a snake.” (p. 7) それに There was something ominous in the atmosphere. It was as though I had been let into some conspiracy.” (p. 8) (即ち闇の奥は人の隙を窺う陰謀の世界でもあるのだ。) 表の部屋には、冷たい目をした、黒服の事務の老女が編物をしている。“Not many of those she looked at ever saw her again—not half, long way” (p. 8) 更に健康診断をした医師は、そこへ行くものの確実な死あるいは狂気を予言するのである。そこに漂う雰囲気は、人間のいとなみの空しさ、はかなさ、人間の夢や努力を塵埃のように一朝にして吹き散らす何か運命的な力、乃至死の息吹、そして恐しい魅惑のそれで

ある。そしてそれが、雰囲気を持つ紛う方ない意味である。

次に彼は伯母を訪ねる。そこでさえ、女たちが築きあげている世界は
 “would go to pieces before the first sunset. Some confounded fact
 we men have been living contedly with ever since the day of crea-
 tion would start up and knock the whole thing over.” (p 9)

文化の中心パリの都内にある、これらの場所さえ、アフリカの heart of
 darkness の前哨基地なのである。しかもマーローは、いざ出かけるとな
 ると、“I felt as though, instead of going to the centre of a continent,
 I were about to set off for the centre of the earth.” (p (10) といっ
 た予感さえ感じるのである。

それから Marlow は、汽船に便乗して、アフリカの沿岸を幾日も航海
 する。そこでも既に荒廃と死とが至るところにころがり、顔をのぞかせて
 いる。軍艦が陸地に向って戦争さえしかけている。“There was a touch
 of insanity in the sight...” (p 11) その軍艦では、一日に三人ずつが病氣
 で死んでいっている。いくつかの場所に寄港するが、そこは、“...the
 merry dance of death and trade goes on in a still and earthy at-
 mosphere as of an overheated catacomb...” “impotent despair” が
 あふれ、腐り、“...the general sense of vague and oppressive wonder
 grew upon me. It was like a weary pilgrimage amongst hints for
 nightmares.” (p. 11)

このような引用は、もうやめよう。それは暗い恐しい測り難い風景の描
 写と共に、無際限につづいていて、その結果は、濃密で有毒な霧となって
 立ちこめ、jungle のように掩いかぶさる雰囲気となっていて、読者はほ
 とんどそれを押し分けて進ませられるような感じさえ抱く。いよいよコン
 ゴ河の河口に着き、更に三十哩溯って、一つの出張所に着くと、この雰
 気は、いよいよ濃くなりまぎってゆく。首を吊って死んだ、あるいは土人

に殺された白人たち、富を求めて奥地に向い、二度と帰ってこない探検者たち、虫けらのように死んでゆく土人たち、こわれて捨てられた機械、到るところにみられる死と荒廃と空しいあがきと道化踊り。そして周囲の自然は、測り知れない悪魔的様相を帯びて迫ってくるのである。

Marlow はそこから二百哩を歩いて中央出張所に行き、そこで乗るはずの船が沈んだことを知らされ、三カ月かかって修理し、いよいよ奥地に向って、Kurtz なる一人の病気の出張所員を迎えに出発し、それを連れて帰るのだが、その人物は途中で死んでしまう。

話そのものはこれだけである。つまりは、普通ならば、いくらひきのばしても、十頁の短篇におさまってしまうであろう。それを Conrad は、普通の大きさの本で 100 頁に及ぶ中篇にしたのだ。Marlow の旅という簡易な骨格を掩っている肉は、すべて雰囲気描写——船を待ち伏せている不測の危険に満ちた河と、その周辺の食人種が出没するおそろしい原始の wilderness の描写——である。描写だけでは足りず、マローは不可解とか神秘とかいう意味の言葉をくり返して使う。Incomprehensible, indefinable, inscrutable, unknown, unspeakably, inexplicable, impenetrable, infernal, devilish, mysterious, unearthly などの語であり、それはこの darkness が、宇宙の窮極の根源であり深淵であり、宇宙を支配する魔力であることの認識から発せられる言葉なのである。F.R. Leavis は、これらの言葉が使われているために、作の調子が落ちていると言うが、むしろそれが使われているために、恐ろしい暗黒の性質が、一層迫ってくるのである。他にどのような言葉でそれを説明することができるであろう。

このあたりから、一つの目が、絵画の中心に描きこまれてゆく。それは、はじめは単に茫とした目らしいものにすぎないが、次第に大きくなり明確になり、やがて爛々たる光を帯びてきて、画面一杯に拡がってくる。それは heart of darkness 自体の意味と力を語る核心的象徴なのである。それ

が Kurtz なる人物である。マーローは奥地出張所主任の “Mr. Kurtz” の名を、河口の出張所ではじめて聞くのだが (p 15), それは度々くり返して、いろいろの人の口の端にのぼる。誰もが彼を畏敬し、言い難い驚異を抱き、恐怖さえ感じている。はじめはそこらの白人と同じく無益なペテン師、あるいは貪欲な野心家だろうと聞き流し、彼の名を聞くのを煩わしくさえ思っていたマーローだったが、冷淡な役人から、クルツとは、“...an emissary of pity, and science, and progress, and devil knows what else”... “We want... for the guidance of the cause entrusted to us by Europe... higher intelligence, wide sympathies, a singleness of purpose,” (p. 21) というような言葉を聞き、またクルツが山のように船に象牙を積んで一旦下航してきたが、300 哩下ったところで、船荷は部下に任せ、また荒野にひかれて奥地に引返していったなどという噂を聞き、更に、彼の妖しい絵を見るにつれて、白く輝く巨塔のような姿が、彼の心に次第に作りあげられていく。クルツは超人的な知性と精神力と弁舌をもち、絵画や音楽、その他あらゆる面に秀でた “universal genius” であり、土民たちに神のように恐れられ、崇拜され、慕われており、彼らは、船がクルツを迎えにきたことを察して、沮止するため、襲撃さえしてくる。

しかしマーローの心には、疑念の底流があったかもしれない。彼の噂、たとえば最初に聞いた “He is a very remarkable person... Sends in as much ivory as all the others put together” (p 15) (彼は頭角をぬきんでた人だ——他の連中をみんな束にしたほど、象牙を送りこんでくる) という言葉も、一見単なる讃辞のようにみえるが、既に魔的な何かを暗示している。その疑念は表面にはあらわれないが、クルツの小屋に近づいたところから変わってくるマーローの言葉の調子に察せられる。いよいよ奥地出張所の下に船がつくと、一人のロシア生れの青年があらわれる。彼は 25

才の、まだ若々しい青年である。彼は、青春の情熱と大胆さで、放浪し、探検してきた。（卓越した知性は別として、クルツもここへ来たときには、同じような輝く若い情熱をもっていたことだろう。）彼は宗教家にも似た無我の美しさをもっている。“If the absolutely pure, uncalculating, unpractical spirit of adventure had ruled a human being, it ruled this... youth.” (p 48). 我を灼きつくしたこの清らかな情熱の火が、心身を蝕むアフリカの魔力から彼を守ってきたのだ。彼は偶然に、あるいはむしろ必然的にクルツに遇って、一緒に暮すようになり、クルツに傾倒し、彼を崇拜していた。しかも彼はクルツを恐れている。クルツは、手段を択ばず、土人が折角集めて地中に埋めているのも探し出し、あるいは土人を殺し、時には村落を襲撃するなど、どんな残虐なことでもやって、象牙を手に入るからだ。あるときには、こんなに彼を慕っている純情なこの青年が持っている僅かな象牙さえも、銃をつきつけて奪いとった。小屋のまわりの柵の上には、叛逆したという理由で彼が殺した土民たちの頭骸骨が並べたさえる。狂うには余りにも偉大な人間の、正に狂ったような執念を、この崇拜に満ちた青年さえ、どう説明していいのか判らない。少くとも是認はとてもできないのだ。全く相矛盾する両面——偉大さと残虐な所為の両面をあらわすクルツを、どのように解釈したものであろうか。その窮極の意味を、さすがの冗舌なマーローも、ついにはっきりと語ろうとはしない。しかし、それは、その後のクルツの言葉や、彼の作った文や、それにマーローの謎めいた言葉などから、きわめて明瞭となる。

この青年の話と、しゃれこうべの行列は、この作品の climax を形造る。それは対立する二つの力の均衡の緊迫及び破壊によって形造られる劇的 climax ではない。驚くべき真実の revelation, いわば epiphany である。壮大な理想と知性と universal genius をもった超人が、人間救済の使命に導かれて、この暗黒の世界にやってきた。しかし、“The wilderness

...had caressed him, embraced him, got into his veins, consumed his flesh, and sealed his soul to its own by the inconceivable ceremonies of some devilish initiation.” (p. 42-3) なのであり、彼は、“The heavy, mute spell of that wilderness that seemed to draw him to its pitiless breast by the awakening of forgotten and brutal instincts, by the memory of gratified and monstrous passions.” (p 59) に、がんじがらめにされた。その呪いを破るすべはない。彼の頭は曇ってはいないが、彼の魂は狂っている。彼は “exalted and incredible degradation” の中にひたっているのだ。

彼が高貴であったが故に、そして、今でもその片影をとどめているが故に、この墮落はリヤ王やオセロのそれのように悲劇である。かといって、この物語は高貴な人の墮落過程を描く drama ではなくて、結果の観察及びその原因の推理である。その直接の誘因は荒野であるが、クルツ自身の内部にも、その誘惑に呼応するものがある。人間が嘗て動物であった時代の名残、いや、人間の中の動物—forgotten and brutal instincts—が眠っているのだ。

そればかりではない。彼には、何か欠けているものがある。restraint (自制心) がないのだ。彼がそれに気づいていたかどうか判らないが、少くとも最後の瞬間には気がついたことだろう。しかし荒野は早くから彼の本性を捉えていて、彼が途方もない侵入を企てたことに対して、おそるべき復讐を加えた。荒野は彼に悪魔のような叫びをつづけ、その声は、彼の心の核心が空虚であるために、 (“because he was hollow at the core.” p. 51) 一層高く鳴りひびいて、彼の中に巣食う暗黒を目ざまさせたのだ。

同時に、マローも亦、この間中、自分とクルツの同一性を感じないではいられない。荒野にひかれ、船を捨てて放浪したいという願い、自分の心を冒してゆく荒野の神秘、心にひろがってゆく闇の力を、彼も亦感ぜざ

るを得ないからである。

マーローは、衰弱し切っているくせにまた荒野に戻ろうとするクルツを、無理に船に寝かせて、下流に向って下ってゆく。クルツの心の中には、最後まで神秘の荒野への渴望——そして憎悪——おそらくは彼の魂をとりこにし呑みつくしたことに對する憎悪——が、戦っていた。“... both the diabolic love and the unearthly hate of the mysteries it had penetrated fought for the possession of that soul satiated with primitive emotions, avid of lying fame, of sham distinction, of all the appearances of success and power.” (p. 61)

臨終にクルツは、真の事態の啓示を得たかの如く、荒野の神秘とそれに食いつくされた自分の一生を振り返って、呻くような声で叫ぶ。

“The Horror! The Horror!” (p. 85)

この言葉——「おそろしい! おそろしい!」——が、第二の climax のようにもみえるが、第一の climax で既にあきらかになったこと、少くとも推察できることの、要約にすぎない。

このあとは epilogue に当る部分になる。

この作品の構成は、I 章は導入部で、前述の粹の部分と、中央出張所までの船旅及びそこでの三カ月の生活であり、クルツに對する漠然たる好奇心で終る。II 章は、クルツが病臥している奥地駐屯所までの船旅であり、III 章は、クルツとの対面及び彼の死、及び epilogue である。

取扱われている主なテーマは、I 章では、諸人間のいとなみの姿、II 章は、荒野の神秘、III 章はクルツであり、いわば正反合の弁証法的論理の筋を辿って、真実を追求している。というのは、クルツは、人間と荒野との対決の果ての姿、即ち、I 章と II 章の綜合の姿だからである。もう少し平たく言えば、コンラッドはマーローを使って、渦巻形に荒野の本質に迫ってゆき、最後に、目のあたり見たクルツの姿において、その核心を捉

えたのである。

しからば、荒野とクルツとマーローの三者（いや、むしろそれに象牙を加えた四者）のうち、いずれが主役であろうか。その答えは簡単には出てこない。もしこの作品のテーマが、クルツと荒野の格闘ならば、それは長篇の主題にふさわしいのだが、問題は余程単純になる。クルツが主役で荒野が敵役である。荒野は、象牙を代償あるいは餌として、彼の魂を買ったのである。クリストファ・マーローの *Dr. Faustus* や Maturin の *Melmoth* やゲーテの *Faust* で、Mephistopheles が若返りや長生を餌として野望をもつ人間の魂を買ったように。あるいは Satan が、アナトール・フランスの「タイース」やモームの「雨」における如く、美しい女の肉体の代償に聖職者の魂を買ったように。そして、マーローは単なる語り手であろう。しかし、それにしては、マーローの果す役が大きすぎる。

こうも解釈できよう——荒野は単に場であり、象牙こそは主役である。あるいは、Graham Greene の “The Fallen Idol” における子供のよう、マーローが主役で、荒野も象牙もクルツも、単に人生あるいは自然の神秘への initiation を彼に与える端役にすぎないと。

解釈はいろいろあろうが、私はこう考える。荒野即ち自然の神秘な力は、metaphysical な思想上のテーマの level における主役。クルツと象牙は physical な、factual 乃至 realistic な level における主役、そして、マーローは、両者の間に立って、そのそれぞれの意味を明らかにするいわば meaning あるいは subject の level における主役であると。即ち、いずれも主役であるが、その役割が異なるのである。しかし、たとえそれぞれが何かの意味の主役であろうと、その三者に、軽重があることは当然である。

この作の真の主役は、やはり荒野であろう。即ち題目の示す heart of darkness であり、クルツはその力の象徴的証明者、マーローは語り手で

あり、ギリシャ劇における chorus である。長篇でさえ、いずれかに重点をおくのである。中篇のこの作で、中心があるのは当然である。

しからば、この作品の主題即ち真の主役たる アフリカの荒野——heart of darkness——は、何を意味するのであろうか。それは原始の自然の持つ魔力である。その木魂あるいは余韻は、悪魔の息吹のように、今でも都会の噪音のあいだに漂っている。それは都会が昨日までは原始の闇の中にあっただけでなく、今日でも、人の心の内部にそれが、たとえ眠ってはいようとも、根強く巢食っているからである。事があれば、いや、人間は一瞬の懈怠によってさえ、忽ち内部の原始の闇を目覚めさせ、先祖戻りさせられる。いわんや、荒野の中におかれるとき、人間内部の闇は、外の闇に呼応して、咆吼の声をあげ始め、魂を墮落させ狂わせ、ついには食いつくす。高貴な人間も例外ではなく、また高貴な人間ほど悲劇的であり、やがて彼の高貴さはただ形骸となる。クルツのように、高貴であるのみならず、超人的な知性と才能の持主であれば、悲劇はそれだけ深刻であり、闇の力のおそろしさは、それだけ一層まざまざと感じられる。つまり荒野には人間を崩壊させる力があるのである。それは精神の死を与える。そしてまた死そのものの世界である。

しかし、クルツには、おそらくは本来心にひそんでいた並外れて強い権力欲や所有欲の他に、心の隙、乃至一二の弱点がある。彼には、最初から欠けているものがあったのだ。第一に、Restraint、即ち自制心である。マーローはくり返して自制心のことを言う。それを言語に絶する饑に堪えている雑役の黒人たちに認めて、マーローは、驚嘆、いや神秘さえも感じる。即ちそれは、教養や文化とは関係なく、人間が持ち得る特質なのだ。それをクルツは持っていなかったのである。

第二は、彼は孤独な人間である。彼の両親は共に別々の種族の混血児であるから、彼は、精神的にはどの国にも属さない、いわば無国籍者であ

る。会社の一員という意識も薄く、特に象牙に憑かれて以来は、誰をも信用できず、誰とも共同しない男である。

第三は、彼は、空しい名誉欲とか名声欲とか、成功欲とか権力欲などの背後にある自己意識を、あまりにも強く持っていた。

こういった弱点のために、自分が侵入し征服した荒野によって、かえってとりことなり、侵され、毒され、貪欲な執念の鬼に墮落した。征服したとたん、征服されていたのである。象牙はわなの一つだったのだ。再びモームの“Rain”が思い出される。牧師は女の肉体を征服したとたんに、彼自らの魂が征服されたことを知って、自殺するのである。モームが、コンラッドの“Heart of Darkness”に影響を受けて、“Rain”を書いたのではないかとさえ思われる。

しからば、この荒野の誘惑を逃れる道があるだろうか。コンラッドはその可能性を考えているのであろうか。それとも絶望的なのであろうか。この作品で彼はそれを単に暗示しているにすぎない。この作品が墮落だけを書いているからである。しかし彼が墮落を墮落として、憐憫であれ軽蔑であれ、否定的に書くのは、向上、少くとも闇からの脱出路を求めているからである。即ち、墮落は向上の陰画なのである。墮落を裏返しにすれば、陽画が出てくる。同様に、前述したクルツの弱点を裏返しにすれば、脱出路が見出されるであろう。そして、やがては、荒野の闇に対して光とは何かを見出すことができるであろう。

第一のクルツの弱点、即ち自制心の欠如を裏返せば、自制心そのものとなる。それは、犬などにもみられる条件反射というような訓練の結果得られた反射運動ではない。理性の働きである。より高い理念を実現するための手段であるのみならず、それ自体、人間にのみ与えられた高い威厳ある精神の一つのあらわれである。

第二に、無国籍であり孤独であることの反対は、共同体に属し、且つ連

帯感を持ち、忠誠心、義務観念をもつことであろう。連帯意識は、人を孤独感から救うのみならず、闇の侵入に対して、一つの防壁となる。

第三に、自我意識や欲を捨てた無我や、他への純粋な愛を意味する誠実もまた、闇の防壁となる。この故にクルツを崇拜するロシヤ青年は、唯絶対に純粋非打算的な冒険の精神と、他に対する謙虚で純粋な愛情をもち、極度の窮乏に耐える力をもっていたから、荒野に敗北しないのである。

... “his devotion to Kurtz... came to him, and he accepted it with a sort of eager fatalism. I must say that to me it appeared about the most dangerous thing in every way he had come upon so far.” (p. 49) しかもこの危険を、彼はクルツから、即ち心の闇から、なんらの悪影響を受けることなく脱出するのである。これらもまた、人間のみが持ちうる精神のあらわれである。しかも彼は若いのである。人間精神は、おそらくまだ time の侵蝕作用を受けない青春期において、最も高度に発揮されるものであろう。(そのことをコンラッドは “Youth” でくり返して説いている。Time もまた後でいう destructive elements の一つなのである。)

以上のことだけでなく、前に述べたように、コンラッドは所々に、一見前後と脈絡のない暗示的な意見を挿入する。たとえば額縁に当たるところにみられる “idea” に関する言葉である。征服さえ浄化する “...an unselfish belief in the idea—something you can set up, and bow down before, and offer a sacrifice to...” (p. 4) のことである。かかる無我の理念も亦、人間精神の一つのあらわれであろう。この言葉は、最後の幕、マローとクルツの許婚者の女性との面会の場と照応する。少女が一途にクルツを信ずる姿にマローは打たれるのである。

しかし、クルツ自身も、アフリカに来たときには、高い idea を持っていたはずである。しかしそれも忽ちに崩壊してしまった。彼の名が示す如く、それは kurtz 即ち short 即ち short lived—短命——である。闇の力

はそれほどに大きいのだ。

以上の幾つかの面は、コンラッドがひそかに抱いているところの、荒野の侵入に対する防壁、あるいは闇の力からの脱出路に関する思想である。そしてこれらはすべて、人間のみが持つ威厳ある精神とつながる。

さて、コンラッドの他の諸々の作品にくり返し描かれている世界にふれてみると、彼がアフリカの闇の核心を、どのように受けとっていたか、そしてこの作品が、彼の生涯においてどのような位置を占めていたかが、おぼろげながら判るように思われる。彼は 1889 年 Congo 汽船に二等運転手として乗組んだときには、すでに 1874 年以来 15 年間海上生活をつづけていた。従って、海を通じて、当然、自然の神秘の力を感じていたにちがいないが、アフリカの奥地に航海をするまでは、「自然」の意味や力、意識的体系的に捉えていたかどうかは疑問である。しかし、このときの経験が、コンラッドの世界観を変え、見聞したものの示すみじめさ空しさ恐ろしさに打たれて、海を捨て作家生活にはいる決意を固めたと推測される。その印象の強さが、彼をして、マラリアに罹って病臥中に拘らず、この話の筆をとらしめたのであった。

世界を光と闇との二元においてとらえ、闇を客体視する考え方は、たとえば光に関する考え方は異なっていようとも、コンラッドから Graham Greene に受けつがれて、彼らの小説を貫いている世界観である。そして、この“Heart of Darkness”はその探求であり、実験であり、しかも光の崩壊の諦視である。従って、彼の作品の世界は、常に、人間と、人間をおかす諸々の destructive elements、いわば非条理性との対決から成立つ。作品で彼が主要人物を置くのは、この非条理が極端な形であられる situation である。言葉をかえて言えば実存主義的極限状況の設定なのである。即ち彼の作品は、すべて人間の自由な精神が、この非条理性と対決して、

いかに影響を受け、いかに崩壊するか物語、いや、実験乃至探求なのである。そして問題は、暗黒は、人間の外だけでなく、内部にもまた巢食っていて、外部の闇と呼応して、人間精神を裏切り、崩壊させることだ。彼は愛していた海にさえ、闇の力を感じていたはずだ。彼はそれを、Congoの旅において、骨身に徹して感じ、また意識したのである。

即ち、この旅は、彼にとって、いわゆる initiation の旅であった。その現実認識を明らかにするために、彼はクルツなる、すぐれて優秀な人間を闇の奥に投入してみたのである。その結果は、クルツの心の闇が外の闇と呼応して拡大し力を得、ついには彼の精神をしらずしらずに崩壊させてしまったのである。Jekyll が薬で自分を Hyde に変形させたが、しばらくするうちに、Hyde 的要素は Jekyll 的要素を呑みこんだように、クルツも、気がついたときには、自然の horror に冒され果てていたのである。光とは精神の光であるが、この光は空しい。コンラッドの世界は二元の世界であり、光と共に闇は実在であるが、神の光とちがって、精神の光ははかなく、たちまちに闇にのみこまれてしまう。そしてコンラッドは、クルツという人並すぐれて優秀な人物のなれの果を、マローをして共感させ、驚嘆させ、影響を受けさせ、そして眺めさせ、探求させ、記録させる。結局は、この作品は、コンラッド自身の initiation の旅の意味の、驚くべき見事な象徴化なのである。

かかる宇宙的秘密乃至真実乃至意味を、具体的に明らかにするには、長篇でなくてはなるまい。しかし、一方から言って、かかる驚くべきいわば epiphany を、コンラッドは、ゆっくりと腰をおちつけて書くには、あまりにも強い shock を受けていた。だから彼はこの主題を、物語る代りに、一挙に象徴化することによって、短かくした。しかも単なる象徴では、allegory、あるいは moral fable 化する危険があり、それはコンラッド自

身、我慢がならないことである。彼はこの闇の実体を、読者に知らせるだけでなく、もっと直接に表現描写することによって感じさせなければならぬ。そこから彼は、象徴のみでなく、あらゆる技巧を用いて、闇の実体に迫り、同時に読者に迫ってゆく。前述の杵の技法もそうであり、文明のさ中テムズ河の周囲に嘗てあり、文明人の中に今でもひそむ闇の暗示もそうである。それはアフリカの闇に通ずる入口なのだ。濃厚な雰囲気描写は最も直接的な闇の実体表現のための詩的技巧である。同時に、この自然の闇の犠牲者クルツ、そしてそれを観察し解釈するマーローという人物を設定して、その相関から一つの真実を浮びあがらせるのは、最高の小説的技巧である。最初、この作品から受ける印象の一つは、言葉言葉言葉である。これも亦雰囲気醸成に役立っていると共に、象徴だけでは足りず、コンラッドが、言葉の積み重ねによって、探求し暗示し明示しなければならなかった真実探求の激しい熱情のあらわれなのである。コンゴの旅がマーローにとって “The culminating point of my experience” (p.) であったように、この作品は、コンラッドにとっては、ぎりぎりの頂点であり、認識の絶叫である。長すぎでは力が弱まり、短かくては意をつくせぬ。中篇にならざるを得なかった理由であり、しかも、世上の短篇よりもっと簡潔な筋と、長篇よりもっと重味のある作品となった理由であり、同時にこの作に、コンラッドの文学、いや英国の文学、いや世界の文学に、異様独自の位置を与える理由である。彼のその他の文学は、いわばこの作の系である。*The Secret Agent* は、都会における闇の研究、*Lord Jim* は、人間を待ち伏せていて不意をおそい、我を失わせる闇の力、及び人間に可能な、闇からのわずかな脱出の可能性の追求、そして *Victory* の Lena は、闇に点ずる一条の光の描写なのである。

世界の核心であり、そして人間の内外にひろがる荒野、即ち自然の暗黒

を、これほど追求した作家は他にいないであろう。とすれば、再び問う、この自然の闇乃至霊は、一体窮極には何を意味するのであろうか。それは、そこに帰り、それを実現することによって人間回復と考えるE.M. Forsterや D.H. Lawrence の考え方とは、根本的に異なる。コンラッドは自然に帰ることを人間回復どころか、人間破壊と考えるからである。たとえ人間は自然から生れたとしても、それを越える精神を持つことによって、はじめて真の人間となったのだ。

それでは、グレアム・グリーンのように、闇の実体を悪魔的なものとして捉えているのであろうか。そう、この二人のあいだに、なるほどある程度共通点はある。同じくロンドンの暗黒面を描いたコンラッドの *The Secret Agent* とグリーンの *It's a Battlefield* は、共に、野心や貪欲や無慈悲や嫉妬や憎悪や絶望の渦巻く暗い陰惨な世界である。それにまた、“Heart of Darkness” には、devil とか devilish とかいう言葉がくり返して用いられている。このような言葉を用いる作家は、原則として宗教的世界観の持主である。また、主人公クルツの墮落は *Paradise Lost* における神の權威を渴望した Lucifer の墮落を連想させる。しかし、コンラッドの他の作品では、宗教的な要素はほとんどみられない。それに、グリーンはほとんど風景描写をせず、運命観を持たず、専ら人間の悪や罪、及びそれから生じる社会悪を描く。コンラッドは、自然のための自然描写をし、その自然は、運命乃至運命的な偶然を思わせる。彼が描く人間内部の自然は、原始の自然——権力、本能、性本能——であるが、それは「業」の感じを持つ。罪業あるいは原罪ではなく、むしろ人間が自然から負わされた運命的な「業」である。そして、この運命的な力は、Satan や Mephistopheles と違って積極的な悪意はもたないのである。一方、コンラッドにおいて、暗黒の自然に対立するものは、神ではなく、人間精神である。しかし、コンラッドの心の中で、この自然や人間性のもつ evil が Satan

闇黒の探求と表現—“Heart of Darkness”

とはつながっておらず、人間精神のかなたに神の光が考えられいてないとは、私には断言できない。（このことは一層深い研究と洞察力を必要とするだろう。）

コンラッドの自然観が、最も近いように思われるのは、Thomas Hardyのそれである。しかしコンラッドは、Hardyほど絶望的ではなく、たとえばはかなくかすかなものであろうと、作品のどこかに精神の光をともしようとする。*The Secret Agent* や “Amy Foster” のように、その光が全然見られない作品もあるが、しかしどこでその光が消えたのか、模索の手がかりは与えられる。

このような点に、人間に働きかける恐ろしい自然の力の深刻な認識と、しかもなおその深淵の上に輝く精神の光を、これほど謙虚に、同時にこれほど情熱をこめて追求し描写した作家は、他にいないと思われる所以があるのだ。彼は一方において未曾有の完璧な小説芸術の作者であるが、かかる芸術の完成には、作者自身の現実と理念追求の情熱が、与って力があるのではあるまいか。そしてそれはまた、彼が芸術家であると共に最高の生活者——生命を賭して海という神秘の自然と戦い、船という共同体を守った船長——であったことにつながっているように、私には思えてならないのである。